

平成 21 年 5 月 20 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18530267
 研究課題名（和文）イギリスにおけるエスニック・マイノリティ女性の労働とその変容：
 1951-1979
 研究課題名（英文）The ethnic minority women and their labour conditions in Britain：
 Continuity and change, 1951-1979

研究代表者 奥田 伸子(OKUDA NOBUKO)
 名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・教授
 研究者番号 00192675

研究成果の概要：第2次世界大戦後の女性労働市場におけるエスニック・グループ間の相互関係を、政府文書や当時の社会調査などを主たる資料として分析した。福祉国家成立期・初期において、移民女性は未婚白人女性が忌避する職場に労働力を提供し、福祉国家体制に必要な労働力を供給した。白人女性もパートタイマーとして利用されたが、パートタイム労働とエスニック・マイノリティ女性の労働は補完関係である。60年代後半以降、マイノリティ女性においても、一定程度の社会上昇が見られた。その過程では、多くの労働争議も起こったが、個々の女性団体からの協力は得られるものの白人中心の女性運動一般からの援助は得られなかった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,400,000	0	1,400,000
2007年度	900,000	270,000	1,170,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	450,000	3,350,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：経済史

キーワード：移民 ジェンダー エスニシティ 女性労働 イギリス ブラック・フェミニズム

1. 研究開始当初の背景

(1) 従来のエスニック・マイノリティにかんする研究は個々のエスニック・グループに焦点を絞って研究してきた。しかし、こうした研究では、エスニック・グループ相互の影響やグループ間の軋轢には十分な注意が払われないために「肌の色」による差別を重視した、平板で、単純化された理解になっていると考

えられる。

(2) 本研究ではこのような研究のデメリットを克服するためにエスニック・グループ間の相互関係を考慮することが大切である、と考え、この視点から研究を進めることとした。なお、ここでいう「エスニック・グループ間」はマイノリティ・グループの

「間」のみならず、イギリス生まれの「イギリス人(白人)」女性とマイノリティとの「間」も含む。

2. 研究の目的

(1) イギリスにおいて人口の多いエスニック・マイノリティ・グループ、すなわち、アフロ・カリビアン系(西インド諸島出身)、インド系、パキスタン・バングラデッシュ系の女性労働者の詳細な移民史、および労働史を具体的に把握すること。

(2) 特定の職業におけるエスニック・グループの相互関係の把握につとめる。具体的には、看護師(看護婦)、病院の家事労働スタッフを中心としたNational Health Service関連の職業を中心とする。

(3) 戦後イギリスの労働市場におけるエスニシティ間の相互関係およびジェンダーとエスニシティの関連を考察すること。

3. 研究の方法

(1) 本研究は歴史研究であるので、研究の中心は、資料収集とその分析である。そのため、ここでは収集する史料について記載する。

1950年代後半以降の移民女性の労働にかんする資料について。日本国内では国立国会図書館、慶応義塾大学図書館、早稲田大学中央図書館である。国立国会図書館においては、イギリスで最初にエスニック・グループと職業との関連を調査した1966年の『10%サンプル・センサス』を精緻に分析する。慶応義塾大学、および早稲田大学図書館については、1960年代以降のさまざまな「人種関係」についての雑誌から関係記事の収集・分析を行う。

イギリスにおける資料収集は the National Archives、および British Library で行なう。The National Archives において収集するのは、労働省、内務省、植民地省(コモンウェルス省)、保健省等関係省庁である。他方、閣議関係文書はすでにマイクロフィルム化されているので、これを購入し利用する。The National Archives における資料収集は、50年代から60年代後半が中心であるが、この時期にこだわらず、80年ごろまでマイクロ化されていない省庁分を中心に収集する。1950年代以降の移民の流入はイギリス社会にこの問題にたいする大きな関心を巻き起こし、多くの社会調査がなされている。このような調査も、資料として有効であるので、主として British Library で調査報告書を精読する。

(2) 研究の途中経過を、2006年9月に第5回 Anglo-Japanese Conference、他、国内外における学会等での報告し関係する分野の研究者と意見交換を行う。

4. 研究成果

(1) 1966年の『10%サンプル・センサス』の分析から、移民女性の労働についてそれぞれ出身国(地域)別に、労働市場の異なった部分に位置づけられ、特定の職に集中していたことが示された。すなわち、移民女性全体の労働市場が存在したわけではなく、それぞれの出身国(地域)およびその背後にある女性の職業への考え、女子教育観などの供給側の事情、受け入れるイギリス社会における能力や適性に関する偏見や期待によって労働市場は分断されていた。また、移民女性と白人イギリス人女性のパートタイム労働との競合関係であるが、サービス業の一部など見られるものの、カラード労働者への偏見などのために、多くの場合異なった労働市場に属していた。

(2) イギリス、および国内における資料収集において労働省、外務・コモンウェルス省、内務省などの文書を中心に1950年代後半、60年代70年代初頭の関係資料の収集、分析を行った。この結果、移民初期において、イギリス政府の移民女性への関心も評価も低かったが、1960年代後半から70年代には、サービス産業の発達した福祉国家における労働市場の底辺を支える低賃金労働力として積極的に移民(マイノリティ)女性の位置づけて行ったか過程が実証的に示すことが可能である。

(3) マイノリティ女性による労働争議については、本研究課題がカバーする最終時期である70年代が中心である。この時期には、1974年のインペリアル・タイプライター社および、National Health Service(看護師中心)、および1976年のグランウィック写真現像所の労働争議がある。これらの労働争議については、従来の研究においても一定の紹介があるものの、マイノリティの異議申し立てとして認識されており、イギリス女性史上の画期としては当時も現在もみなされていない。また、1979年に結成されたサウスオール・ブラック・シスターズは、マイノリティ・コミュニティ内における女性の人権侵害の告発、宗教的原理主義への異議申し立てなどを行った。いずれも個々の白人団体からの協力は得られるものの白人中心の主流フェミニズムからの援助は得られなかったことを示した。

(4) 労働力移動の過程におけるジェンダーとエスニシティ分析から、労働市場のジェンダーおよびエスニシティ構造は絶えず再編成されていることが考えられる。第2次世界大戦直後のイギリス人白人女性の「家庭回帰」の時期にあつては、移民女性が、同じエスニシティ・グループの男性よりも「専門職」とみなされた職業に就く機会を与えたとされている。しかし、申請者が行った研究では、これは確かにアイルランド人女性についてはあてはまるものの、その後急増するアフロ・カリビアン系看護師については、政策当局者、病院などの「人種の偏見」のために、「専門職」への進出は困難であつた。その結果、移民労働力の導入にあつて、専門職の細分化が行われ、主として労働力不足が著しかった職場から配置されたと考えられる。より長期的には、かつて「専門職」であつた職種が「准専門職」あるいは「中間的な職業」とされる、いわゆる「専門職」のダウングレードの可能性を仮説として考えている。

(5) 本研究の成果は以下のように位置づけられる。従来の研究は労働市場を「白人男性労働者」対「白人女性労働者・(男女)移民労働者」という構図で理解しているが、この構図は単純化されすぎており、労働市場のダイナミズムや、労働力移動にともなうジェンダーの揺らぎの局面が捉えられていない。本研究ではこの点を中心的に研究している点に特徴がある。06年9月にロンドン大学で行なわれた第5回 Anglo-Japanese Conference of Historians において、Women Immigrants for Domestic Staff in Hospital: Gender and Ethnicity in Labour Market in the mid-Twenties Century Britain'と題する報告を報告し、研究視角および研究対象について高く評価された。また、国内におけるイギリス女性史研究は、白人女性を中心であり、イギリスのマイノリティ研究あるいは、アメリカ等のカラード女性史、ブラック・フェミニズム研究などとの連携も進んでいない。本研究は、女性労働の視点からこのような研究の空白を補うものと考えられる。

(6) 経済史においてこれまで「静態的」に扱われてきたジェンダーを移民過程および時間の流れに沿って動態的に把握することが今後の研究課題である。女性の経済的役割は、労働力移動および時間の経過=移民のホスト社会への定着によって変化するものと考えられる。申請者のこれまでの研究から移民女性労働力は、1950,60年代はホスト社会であるイギリス社会の性的役割分担を維持するための「ジェンダーレス」な労働力として利用され、70年代以降のイギリス人女性(の一部)の社会的上昇期においては、低賃

金のサービス業、軽工業などを担った。さらに本研究によって、移民社会の成熟による一部の移民女性(および第2世代以降)の社会的上昇の可能性の側面と共に、移民初期に一時的に揺らいだ移民コミュニティにおけるジェンダーの再編成の可能性をしめることができた。その一方、移民女性の異議申し立ては、移民社会内におけるジェンダー秩序を大きく再編成するとともに、ホスト社会のジェンダー秩序にも大きく影響を与えるであろう。これらについては今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1件)

奥田 伸子、「1960年代イギリスの移民女性労働とジェンダー——1966年サンプル・センサスを中心に——」(名古屋市立大学大学院人間文化研究科)『人間文化研究』第7号、査読無、2007年、139-154。

〔学会発表〕(計 4件)

Nobuko Okuda, 'Women, War and Citizenship: a comparison of women's suffrage movements in Japan — A Comparative Perspective', Oxford-Kobe Workshop: Violence and Statehood in Europe and Japan, 2009年3月28日、The Kobe Institute,

奥田 伸子、「20世紀後半のイギリス社会における"Race" IssueとFeminism イギリス女性史研究会・成蹊大学文学部学会共催シンポジウム「奴隷貿易廃止と女性たち——200年目の記憶を継ぐために——」2008年9月28日、成蹊大学

奥田 伸子、「第2次世界大戦直後の移民女性とジェンダー」イギリス史研究会(第8回例会)、2007年10月13日、明治大学

Nobuko Okuda, 'Women Immigrants for Domestic Staff in Hospital: Gender and Ethnicity in Labour Market in the mid-Twenties Century Britain', the 5th Anglo-Japanese Conference of Historians, 2006年9月29日、Institute of Historical Research, London

〔図書〕(計 2件)

Nobuko Okuda, Women Immigrants for Domestic Staff in Hospital: Gender and Ethnicity in Labour Market in the mid-Twenties Century Britain, Migration and Identity in British History : proceedings of the 5th Anglo-Japanese Conference of Historians, 2006、242-257.

奥田 伸子、「第 2 次世界大戦、そして現在 何が変化し、何が継続したか」、『イギリス近現代女性史研究入門』、青木書店、2006 年、297-314。

6 . 研究組織

(1)研究代表者

奥田 伸子 (OKUDA NOBUKO)
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・
教授
研究者番号 : 00192675

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし